

最 優 秀 賞

やけど

秋 田 県 立

横 手 高 等 学 校 一 年

後 藤 の は ら

いとこが泊まりに来た。腕にやけどの跡があった。てかてかして痛そうだ。共働きの両親の代わりに夕飯を作る彼女だが、調理中のミスにしては変な位置だ。

「あ、これ？理科の実験やってた時に、アルコールランプで焼いたピーカー鋏を押し付けられた。」

何ということだ。先生は知っているのかと聞いたら、見てないのに言っても信用されないと思って伝えてないとのこと。

「ジュウッて音したねえ。」

と、謝るところか笑っていたという犯人。いとこは「犯人」は大げさだと言っていたけれど、これは傷害罪ではないのか。もし年齢が二十歳すぎていたら、新聞に載っ

ていたかもしれない、犯罪行為だ。

人間の肉も牛肉も焼けば音がするのか実験したかったという「犯人」は、とてもそんな残酷なことを思いつきそうには見えない女の子だという。想像力がないのか思いやりがいいのか、いや、両方なくても人間を実験台にするなんて恐ろしいことだ。どうしても試したいなら自分の腕を焼けばいい。熱いかもしれないという予想はついていたからこそ、他人の腕を焼いたのだから、確信犯だ。このまま黙っていても次の犠牲者が出るかもしれない。

「親には話したの？」

「いじめのニュースが氾濫している時に、こんな小さなやけどで大騒ぎしては担任の先生に迷惑かけるから我慢しろって言われた。」

今回の事件は小さなことでも、たまたまでもない。悪いことだと気付かないまま社会に出たら、もっと大きな事件を引き起こすかもしれない。今、黙っていれば、その子を救ったことにはならないと思う。今、自分のしたことを知り、悔やみ、償わないと、実刑判決をうけるような凶悪犯人に育つかもわからない。

それにしても驚いたのは、県や学校によって先生方のいじめ指導に差がありすぎることだ。いとこが転校した中学校は、もともと大規模校で目が行き届いていなかったのに、原発事故や津波で自宅に戻れなくなった生徒が転校してきて、生徒数が増えさらに大変な状況だそう。だ。いとこのようにおとなしい子はすぐにねらわれる。大騒ぎする親子の対応で忙しくて、じっと耐えている子は気付いてもらえない。

私の出身中学の先生方は、怖かった。どうでもいいことでも怒鳴られたり部活動禁止されたりした。たとえば、ヒトラーの真似をした同級生が体育館に呼び出されて一時間以上説教されていた。

「ドイツの人たちがそばにいたらどんな気持ちになるか考えてみる。収容所で苦しんで亡くなった人たちに心の中でお詫びしろ。」

知らないということは怖いことだと、その時に思った。どうでもいいことどころか、大切なことだったのだ。

去年の原発事故に対して、他国の人の心無い書き込みがネットを炎上させたこともあった。『原爆の次は原発か、いっそのこと日本人全滅すればよかったのに…』

これなんて書き込んだ人を調査して、徹底的に反省させ、処罰すべきだと思った。よりによって、戦後六十年以上経って、未だにまだ原爆の後遺病に苦しむ人たちが生きているというのに、どこをどうすればこんな残酷なセリフを思いつくのか、憤りを抑えることができなかつた。

私も何度かやけどしたことがある。ストーブの跡が残っている部分もある。すぐに冷やして痛みが残らないように手当てしてもらえたけれど、当時の広島や長崎で被爆した人はどうだったろう？ほとんどの人は薬も包帯も足りなくて、治療法も病院も、生きる希望もないまま逝つたと聞いた。だからこそ自らも被爆しながら手当てに当たった永井隆博士の功績が輝き続けているのだ。

平和を語るなら、まず、やけどの痛さを想像してみる。命が一瞬で影になったほどの熱さを想像してみる。冷やせば治まる傷ではなくて、生きている間ずっとつきまとう痛みがどんなものか、自分に耐えられるか想像してみる。

そして、無理だと分かったならば、せめて犠牲になつた人たちに自分ができることは何かを問うてみる。

安易に平和を語ってはいけない。知らずに誰かを苦しめるかもしれないから。平和はあまりに広くて深くて難しい。まずは、隣にいる人を苦しめたり悲しめたりしないようにすることが大切だと思う。

いとこのやけどは、いろいろなことを考えるきっかけになった。私は、小さな小さな痛みに気付いて助けてあげられるような大人になりたい。小さな平和から大きな平和が生まれる。小さな平和を守ることのできる大きな平和を守ることができる。そういう良いサイクルが生まれるように世界が変わってほしい。

